

前提取り消し否定とメタ言語否定

著者	田中 廣明
雑誌名	研究論集
巻	76
ページ	1-16
発行年	2002-08
URL	http://doi.org/10.18956/00006329

前提取り消し否定とメタ言語否定

田 中 廣 明

1. はじめに

本稿では、田中 (2001) ではふれなかった問題のうち、「前提取り消し否定 (presupposition canceling negation)」が通常の「メタ言語否定 (metalinguistic negation: 以下、MN)」と同一のものと考えられるかどうかについて、その序論としての論考である。田中 (2001) で考察したメタ言語否定は次のような例である。

- (1) a. We don't eat tom[a:touz] here, we eat tom[eiDouz]. (発音)
- b. He isn't neurotic OR paranoid; he's both. (一般会話の含意)
- c. The king of France isn't bald—there is no king of France. (前提)
- d. I didn't manage to trap two monGEESE—I managed to trap two monGOOSES. (形態素)
- e. Grandma isn't feeling lousy, Johnny; she is indisposed. (スタイル/使用域)

(1a) は「発音の仕方」、(1b) はどちらか一方が真であれば良いという「一般会話の含意 (generalized conversational implicature)」、(1c) はフランスには王様がいるという「存在前提 (existential presupposition)」、(1d) は mongoose の複数形の「形態素」、(1e) は気分が悪いという「informal なスタイル」のみを否定してる。これらの例は、真理条件的 (truth-functional) な意味 (命題内容) を否定している「記述的否定 (descriptive negation: 以下 DN)」ではなく、命題以外の部分を否定していると考えられる (田中2001: 1)。

これらの例の元になっているのは、Horn (1985; 1989) の次のような分析である。

- (2) "... [metalinguistic negation] must be treated not as a truth-functional or semantic operator on proposition, but rather as a device for objecting to a previous utterance on any grounds whatever—including the conventional or conversational implicata, its morphology, its style, or its register, or its phonetic realization." (Horn 1985: 133)

Horn は、MN とは、概略、「命題に対しての真偽値的・意味論的演算子ではなく、前言の発話

に対して反対する（異議を唱える、否認する）ための装置であり、その際否定されるのは（命題ではなく）慣習的・会話的含意、発音、形態素、スタイル、使用域などである」としている（田中2001: 1）。この引用でははっきりと述べられていないが、Horn が (1c) のような前提取り消しの例も他の MN と同列に扱っていることは明らかである。

田中（2001）では、(1c) を特に断りもなく、他の例と同列に扱ったのであるが、Carston（1996; 1998）の前提が矛盾を表すかどうかのテスト（後述その2）を待つまでもなく、直観的にも (1c) とそれ以外の例は異なっているという認識が生じる。この問題は、古くは、Frege, Russell, Strawson といった哲学者によって初めて導入され、哲学的論議を呼んだとされる（西山 1983: 191）。本稿は、この問題の序論であり、哲学者（主に Russell, Strawson）、さらに最近の言語学者（Burton-Roberts, Horn, Carston）たちの議論をふまえ、前提の一般的な性質は図（figure）と地（ground）あるいは話題（topic）と評言（comment）でとらえられることを考察していく。以下第2節では Frege, Russell, Strawson たちの伝統的な議論をまとめ、第3節では Russell 流の外部否定（ここで言う前提取り消し否定）と内部否定を図と地（話題と評言）の対立でとらえる。ただし、西山（1983）も言うように話題と評言という概念は、文脈や我々に日常的な知識に左右されやすい面を持っており、前提のどの部分を意味論的なものと考え、どの部分を語用論的なものかという問題が残る。この点に関しては、次のその2で執筆予定である。また第3節では存在の前提についてもふれる。第4節は本稿のまとめである。このように、本稿はあくまでも (1c) にみられるような前提取り消し否定がこれまでどのように扱われてきたかという問題の糸口になるものとして位置づけたいと思う。その2では、最近の議論の主流である Carston と Burton-Roberts の論争をとりあげ、前提取り消しは MN とは分けて考える必要があることを主張する。

2. 哲学者たちの議論

西山（1983: 192）、Marmaridou（2000: 120-21）によると、Frege は、「指示対象を欠く名辭の文（の表す命題）は真理値を持たない」とする意味理論を構築したとされる。通例は、次の固有名（Kepler）を含む文とその否定は、Kepler が存在することを前提としている。

- (3) a. Kepler died in misery.
 b. Kepler did not die in misery.

さらに、(4a) (4b) に見られる、時間副詞節の中の出来事は、その出来事が起こったことを前提するとされる。つまり、(4a) とその否定 (4b) はともに (4c) を前提とする。

- (4) a. After the separation of Schleswig-Holstein from Denmark, Prussia and Austria quarreled.

- b. After the separation of Schleswig-Holstein from Denmark, Prussia and Austria did not quarrel.
- c. Schleswig-Holstein was once separated from Denmark.

(cf. Marmaridou 2000: 121)

Marmaridou (2000: 121)によると、(3) と (4) から、(指示対象をもつ) 固有名と時間副詞は、(i) 前提を持つことから指示 (reference) を持つ、(ii) 肯定文と否定文は前提を共有する、(iii) ある断定、あるいは文が「真」あるいは「偽」であるためには、その前提が「真」あるいは「偽」でなければならない、という3つの結論が導き出される。この3つの結論、特に (iii) から、ある文に (その中に含まれる) 指示対象が欠けていると、その文の表現は「意味 (sense)」を持つが、「何も指さない」すなわち、その表現は「真」でも「偽」でもないことになる。

様々な例のうち、最もよく議論されてきた例は以下である。

- (5) a. The (present) King of France is bald.
- b. The (present) King of France is not bald.
- c. There is a (present) King of France.

すなわち、Frege は、後で述べる Strawson と同じく、フランスには王様がないのであるから、(5a) (5b) は真でも偽でもないことになるという主張をしていることになる。しかし、もしある文が、「真」か「偽」かによって意味を持つ (meaningful) とするならば、真でも偽でもないのに The King of France is bald が意味を持つとどうして言えるのかという疑問が出されることになる (Marmaridou 2000: 121)。

Frege に対抗し、この疑問に答えたのが Russell (1905) である。Russell のこの理論は、「記述の理論 (theory of description)」と呼ばれ、その後 Strawson が反論するまで、45年にわたり、この種の問題を扱う最有力の理論として君臨していた (Levinson 1983: 209 (訳本))。Russell は、(5a) は、(6a) (6b) (6c) の連言 (conjunction: and で結ばれた文) であるという。

- (6) a. There is a King of France.
- b. There is only one King of France.
- c. There is nothing which is King of France and is not bald.

論理的な連言の真偽値は、一つでも「偽」になれば、全体が「偽」になる。(6a) (6b) (6c) が合わさった意味を (5a) の意味だとすると、(5a) は「フランスの王様なるものがいて (6a)、ほかにフランスの王様なるものがないが (6b)、フランス王様ではげでないものはいない」ことを表す。ところが、我々の日常の知識では、少なくとも (6a) は「偽」であるので、全体も「偽」であり、(5a) は「偽」という「真偽値」を持つことになる (すなわち、「フランスの王様ははげである」という意味)。通例は、(5a) その否定の (5b) ともこの意味にとるのが

普通で、あたかもフランスに王様がいるかのように解釈される。

さらに Russell は、(5a) の否定である (5b) は、「もし、この not が文全体を否定しているのなら (つまり It is not the case that the present king of France is bald. なら)、「偽」の立言を否定していることになり、全体は「真」になる」(太田 1980: 112) という。すなわち、(5b) は、(7a) と上述の意味の (7b) とで曖昧であるとした。

(7) a. It is not the case that there is exactly one present king of France and he is bald.

$\sim \exists x (\text{King}(x) \ \& \ \sim \exists y ((y \neq x) \ \& \ \text{King}(y)) \ \& \ \text{bald})$ (フランスの王様がはげていること自体があり得ない)

b. There is exactly one present king of France and he is not bald.

$\exists x (\text{King}(x) \ \& \ \sim \exists y ((y \neq x) \ \& \ \text{King}(y)) \ \& \ \sim \text{bald})$ (フランスの王様が存在し、はげしていない) (cf. 小泉 1990: 204-05)

(7a) は「外部否定」、(7b) は「内部否定」と呼ばれる。Russell はふれていないようであるが、(7a) の外部否定は、(8) のようないわゆる「メタ言語否定」に相当する。

(8) The King of France is not bald, because there is no King of France.

Russell に対して Strawson (1950) は、文 (sentence) と文の使用 (use of a sentence) を区別すべきであるとしている。「真理値」を決められるのは、文ではなく、文の使用による陳述 (statement) であると考えた。「Russell では the king of France がもっている指示作用を存在の断定 (assertion) に還元して考えているが、Strawson は指示と断定は異なった作用で、指示を断定に還元することはできないとする」(太田 1980: 112-13)。(5a) のような文が使用できるためには、実際にフランスの王様がいることが必要で、その場合は、真か偽を判断できることになり、いない場合は「真でも偽でもない」すなわち「真偽性」が問えないとする。あるいは、「真」か「偽」かさえ話の遡上に登らないとしている。太田 (ibid.) は、「(5a) のような文は、フランスに現在王様がいることを断定しているのではなくて、前提 (presupposition) としているのであって、もしこの前提が満たされないと、この文は偽になるのではなくて、真であるとも偽であるともいえない、すなわち真、偽のどちらかの真理値は持たないと考えた」とまとめている。

このように、Russell と Strawson の立場の違いは、伝統的な二値論を認めるか、三値論を認めるかという相対する立場になる。

(9) Russell 流 a. 内部否定			b. 外部否定		
S'	S	~S	S'	S	¬S
T	T	F	T	T	F
T	F	T	T	F	T
F	F	F	F	F	T

(10) Strawson 流 a. 内部否定			b. 外部否定		
S'	S	~S	S'	S	¬S
T	T	F	T	T	F
T	F	T	T	F	T
F	#	#	F	#	T

※S'はSの前提。~SはSの内部否定。¬SはSの外部否定。

※Tは真。Fは偽。#は真でも偽でもないことを表す。梅森(1998)を一部修正。

(梅森(1998)は、前提S'の3段目を#(真でも偽でもない)とし、前提が満たされていないときとしているが、(5a)(5b)では、(6a)が偽であるため、前提は偽と考え、Fとした方が正確であろう。)

(9)と(10)の違いは、第3の値#を認めるか認めないかである。(9a)は(7b)に、(9b)は(7a)に相当する。(10a)は、上述したように、前提が満たされないと全体は真でも偽でもないため、第3段目は肯定(S)であっても、否定(~S)であっても#となる。(10b)は、Strawsonはふれていないが、Strawsonの流れをくむ三値論派の人たちが「真」であるとしたものである。

Russell流の内部否定、外部否定を認めると、否定演算子であるnotが曖昧(ambiguous)になり、意味論的な段階で、2つの意味を認めなければならなくなるという批判がある。これは、不必要な意味は増やすべきではないというGrice(1975)のOccam's Razor(オッカムの剃刀)論、さらに、自然言語ではこの2つの意味を形式的に区別する言語はない事実から、否定は1種類であるという「単義論派(monogulist)」からの批判である(Atlas, Kempson, Gazdarなど。Cf. 梅森(1998))。

以下では、Russell, Strawsonからの議論でどんなことが問題となっているかを取り上げることにする。

3. 内部否定と外部否定

3.1. 話題 (topic) と評言 (comment)

Strawson (1964) は、(5a) のような例は、主語の位置に来た確定記述の問題であるが、次の (11a) (12a) のように主語以外の位置に来た場合は、(11b) (12b) で表された存在前提がない場合、「真」でも「偽」でもないというよりは、単に「偽」といった方がよいとする。

(11) a. Jones spent the morning in the local swimming pool.

b. There is a local swimming pool.

(12) a. The Exhibition was visited yesterday by the king of France.

b. There was a king of France.

これは、the local swimming pool, the king of France が評言 (comment) に位置してきた場合ということになる。(11a) は、「ジョーンズについて言えば、彼は存在しないプールで朝過ごすことが日課になっている」、(12a) は、「その展覧会について言えば、存在しないフランスの王様が昨日訪れた場所だ」ことは、矛盾になる。西山 (1983: 197) も、次のような the king of France は「誰かがはげであるということが確立されている文脈で、例えば、(13a) に対する答えとして (13b) を用いるならば、(13b) は真でも偽でもないと言うよりは、偽の立言をした」ととられることになるとしている。

(13) a. Who is bald?

b. The king of France is bald. (The king of France にストレスを置く)

逆に言えば、(5a) のように、主語位置にきて、指示作用を果たせない (存在前提がない) the king of France は話題 (topic) を表し、その場合に文全体は「真でも偽でもない (真偽性の欠如)」ということができる。例えば、The King of France visited the exhibition. という文は、the King of France が話題であり、指示を持たないとする、指示を持たない話題について話し手がその文の陳述部の「真理値」を決定することはできない (すなわち文全体は真でも偽でもなくなる) ということになる。

ところが、(11a) (12a) のような、陳述部 (評言であるところ) に指示を持たない語がきている場合、話し手が、間違えて発言した場合であると考えられる (Kempson 1975: 88-89)。以下の Horn (1989: 131) からの例のように、あえて間違えて発言する例も見られる。

(14) a. What bald nobles are there?

b. Well, let's see, the king of France is bald. ((13) と同様に the king of France にストレスを置く)

(11) - (14) の例はすべて肯定であった。否定の場合はどうであろうか。Strawson (1964: 112) (cf. Kempson 1975: 86) は、以下の例は、真でも偽でもないのではなく、すべて「偽」

になると言う。これらは、(11)と同様に、指示を持たない語が主語位置以外にきている例である。

- (15) a. The moon wasn't hidden by the clouds because there weren't any.
 b. A: Did the neighbours break the window?
 B: No, it wasn't the fault of the neighbours—we haven't got any neighbours.
 c. The exhibition was not visited by the King of France—France hasn't got a King.
 d. Jones has not spent the morning at the local swimming pool—there isn't a swimming pool in this town. (a-d は Kempson が⁵一部修正)
 e. Neither Aristotelian nor Russellian rules give the exact logic of any expression of ordinary language; for ordinary language has no exact logic.

(Strawson 1954の“On Referring”の最後の文から)

Strawson は、初期の論文では Russell に対抗して外部否定を考えなかったようである。しかし、(15)のような例の存在には気付いていたと思われる。ところが、Strawson は、それをすべて主語位置以外、すなわち話題 (topic) の位置以外にきている例として処理してしまっており、(8)と同じタイプの外部否定の例 (Horn (1985) 以降では前提取り消しのメタ言語否定) とはしていない。そのため、主語位置 (話題の位置) にきても文全体が「偽」(「偽」の立言。(9b) (10b) の表では3段目3列目の T となる。これについては後述) になる例が反論として Kempson (1975: 86-87) によってあげられている。

- (16) a. The clouds weren't hiding the moon—there weren't any clouds. (cf. 15a)
 b. No, the neighbours didn't break it—we haven't got any neighbours. (cf. 15b)
 c. The King of France didn't visit the exhibition—France hasn't got a king. (cf. 15c)
 d. The swimming pool at Ely wasn't closed—there isn't a swimming pool there. (cf. 15d)

まとめると、(11)–(14) で肯定文の場合には、「偽」の前提が話題の位置では全体が「真でも偽でもなく」なり、評言の位置では「偽」になる。ところが、否定文では、全体は「偽」(「偽」が正しいという(真の)立言)となる。この違いはどこから来るのであろうか。肯定文では、「偽」の前提が評言の位置に来る場合、話し手が言いたいことが「偽」の前提そのものになってしまう。すなわち、もともと背景 (background, ground (地)) であった前提が、前景 (foreground, figure (図)) に押し出されることになる。ところが押し出された前提は「偽」である。すなわち、話し手は「偽」の立言をしたことになる。簡単に言うと嘘を言ったことになる。

Horn (1986) は、この主語位置にくる名詞句、that 節をとりあげ、話題の位置にきた指示を持たない語について考察している。

- (17) a. *Charle de Gaulle is not the King of France.*
 b. *The King of France is not Charle de Gaulle.*
- (18) *Elysee sources report that M. Giscard takes himself for the king of France.* ((フランスの大統領府の) エリーゼ宮筋によれば、(大統領の) ジスカール (デスタン) 氏は、自分をフランスの王様だと思っているということである) (*New York Times*, Aug. 1976) (Horn 1986)
- (19) a. *If not for Deep Throat, Nixon would have been our first President-for-life.*
 ((ウォーター・ゲイト事件の) 内部告発者がいなければ、ニクソンが最初の終身の大統領になっていたことであろう)
- b. *If not for Deep Throat, our first President-for-life would have been Nixon.* ((ウォーター・ゲイト事件の) 内部告発者がいなければ、最初の終身の大統領はニクソンであったことだろう)

(17) は、Linsky (1963) (Horn による) の例であるが、1963年当時でも (17a) は「偽」である。(17b) の主語位置 (話題の位置) にきた場合は、上で考察したとおり、内部否定としては真でも偽でもない (Horn は述べていないが、外部否定 (メタ言語否定) としては、「・・・というわけではない」) という意味で、偽の立言をしていることになる。(18) は、主語位置 (話題の位置) 以外に *the king of France* がきているため、「フランス王が指示を持たない」という制約はない。個体としてではなく、属性としてのフランス王を指す。(19) では、反事実を表す仮定法であるため、終身の大統領の存在を前提とするのは (19b) のほうである。(19a) は、「属性としての終身の大統領」という意味で、アメリカに終身の大統領がいたわけではない。

一般に、指示がある場合であれ、*the king of France* のようにない場合であれ、前提 (presupposition) は後景 (background) (地、話題)、断定 (assertion) は前景 (foreground) (図、評言) となる傾向が強い (ただし、西山 (1983) の言うように、前景/後景 (評言/話題) という概念は、あくまで語用論的なものであり、意味論的な概念から出発した前提/断定とどのくらい一致するのかは定かではない)。Marmaridou (2000: 142-147) は、次の (20a) (20b) をとりあげ、(20b) の場合、前提 (背景) が前面に押し出される、すなわち通例の背景と前景の関係が壊れるとしている。

- (20) a. *Mary's not stingy — she is really generous.* (メアリーはけちではない。本当は、気前がいい。)
- b. *Mary's not stingy — she is thrifty.* (メアリーはけちではない。質素なだけだ。)
- (21) a. *stingy* (けちな) の前提: *Spending as little money as possible is not good.* (できるだけお金を使わないのは良いことではない)

b. *thrifty* (質素な) の前提: *Spending as little money as possible is good.* (できるだけお金を使わないのは良いことである)

(20a) は、田中 (2001) で述べた記述的否定 (DN) にあたる。(20b) は、Horn (1985, 1989), Carston (1986, 1989), Burton-Roberts (1989) で詳しく扱われているメタ言語否定である。(20a) は、*stingy-generous* の尺度で述べられており、「けちでなければ気がいい」ことになり、メアリーの性格の記述の仕方が間違っているという命題否定である。しかし、(20b) は、Marmaridou によれば、*thrifty-wasteful* の尺度であるという。通例なら、「けちでない」と言えば「気がいい」ということになり、(21a) の前提は否定されずに保持される。それなのに、後半部で「質素である」つまり (21b) を述べるのは矛盾していることになる。ところが、この場合は、(21a) の前提が表に出てきて否定されている。これは、*Mary doesn't regret abandoning an acting career, because in fact she never did.* (メアリーは女優としてのキャリアを捨てたのを後悔しているのと言うのではない。というのは、実際はキャリアを捨てたということとはなかったからだ) に見られる前提否定と同じ種類である。Marmaridou によれば、*stingy* が (20a) のように否定されると、それはメアリーの性格の記述を否定していることになるが、(20b) では、*stingy* を使うための「社会的な価値、規範 (すなわち良いか悪いか)」を否定していることになるという。(20a) は、「メアリーがけちでないのは、お金のルーズだからではなく、お金にきちんとしているからである」(*Mary is not stingy, not because she is not careful with money, but purely because she is careful to the extent that is socially considered desirable*) (Marmaridou 2000: 147) という意味になり、理由のところは「*wasteful* 対 *thrifty*」という対立になっている。

では、なぜ、(20b) では前提が表に出てくるのであろうか。田中 (2001) では、メタ言語否定を (メタ言語否定の) 話し手の尺度と、それを聞いている聞き手 (あるいは、先行発話の話し手) の持っている尺度が異なるからであるとした。(20a) に比べて (20b) が多少違和感のある発話であるのは、*not stingy* と聞いた場合のまず最初の解釈が、どうしてもメアリーの性格の記述の否定、つまり *generous* のほうへふれてしまい、*thrifty* へはふれないからである。その場合は、先行発話があろうとなかろうとかまわない。ところが、(20b) では、先行発話がなければならない。それを聞いた話し手がその先行発話での *stingy* の使い方が間違っている、すなわち自分の尺度とは違うということを述べたいために使う否定である。この点で、(20b) は、前提否定ではなく、単に尺度が違う否定 (いわゆるメタ言語否定) と考えることもできる。(20b) の尺度とは、(21a) (21b) で示されているように、「お金をできるだけ使わない」という尺度である。ただし、普通のメタ言語否定の尺度と異なるのは、*He is not happy — he's ecstatic* のように、*happy* 対 *ecstatic* が強弱の尺度上の点となっているのに対し、(20b) は「お金をできるだけ使わない」という尺度上で、「良い」か「悪い」かという点が社会的規

範（価値）上で反対に位置するところである。その点で、(20b) は、この話し手にとっては、記述的否定（命題否定）と考えてもおかしくはない。これは、(20a) が *stingy* 対 *generous* と反対のことを言い、記述的否定であるのと同じである。問題は、*stingy* 対 *thrifty* と *stingy* 対 *generous* とがどちらが *marked* と考えられるかである。上述では、Marmaridou の説明を補足する上で、通例なら、「けちでない」と言えば「気前がいい」ということになり、(21a) の前提は否定されずに保持される、と述べたが、はたして (21a) を *Mary is (not) stingy* の前提と見るのかどうかは、疑問が残る。

3.2. 存在の前提

上述したように、*The present King of France is bald.* を、フランス王が存在しないとした場合、Russell は「偽」、Strawson は「真でも偽でもない（真偽性が判断できない）」としている。両者とも、「真」とはなり得ないとするのが共通点である。ところが、Cohen (2000) によれば、存在前提がない場合でも、「真」となり得る場合があるという。ここでは、存在前提がない場合はどういう場合であるのかに焦点を当て、その結果生じる文の意味を考察する。

以下の (22) ような文は、もし聞き手が話し手の車の存在を知らなくても、(22) を聞くと話し手は車を持っていることが分かり、「真」とであると判断できるとされる。

(22) *My car is in the garage.*

ところが、次の (23) のような文はどうであろうか。

(23) *The first fish you catch will be a whale.* (君が最初に釣る魚は鯨だろう)

(Cohen 2000)

(23) は、最初に釣る魚は、まだ存在前提がないのであるから、そういう魚がいるかどうか、すなわち魚の指示ははっきりしない。さらに、魚は鯨ではないので、この文そのものが矛盾した文である。それゆえ、(22) のように、魚の存在 ((22) では車の存在) を同定することはできない。ところが、(23) は、Cohen が引用している C. I. Lewis (1956: 438) によると、次のような応答として使われると意味を持つことになる。

(24) A: *The first fish I catch will be a big one.* (僕が最初に釣る魚は大きい魚になるよ)

B: *The first fish you catch will be a whale.* (君が最初に釣る魚は鯨だろうよ)

Lewis によると、(24B) を聞いた聞き手 A は、(24B) を「偽」あるいは「真でも偽でもない」ととるよりは、「真」ととり、そこから「魚は釣れない」ことを結論づけるという。Cohen はこの推論過程は次のようになると Lewis をまとめている。

(25) a. *The first fish you catch will be a whale.* (話し手による発話)

b. あなたが魚を釣ると仮定する: *f* をあなたが釣る魚とする。

c. (a) と (b) から、*f* は魚であり鯨である。

- d. (c) は矛盾である。
- e. 故に、(b) の仮定は棄却される。
- f. 結論: あなたには魚は釣れない。

(25) の推論から、(24B) = (23) は「真」であることが導きだされる。すなわち、(24B) = (23) は、主語が指示するものがなくても (すなわち、存在前提がなくても)、文全体は「真」になるという、*The present King of France is bald.* と正反対の結論になる。

Cohen はさらに、Chomsky (1981) から (24) と同じような例を検証している。

(26) Note that PRO is like overt pronouns in that it never has an antecedent within its clause or NP. PRO also resembles anaphors in that it has no intrinsic referential content but is either assigned reference by an antecedent or is indefinite in interpretation, lacking specific reference. It is reasonable, then, to regard PRO as a pronominal anaphor. If so, it is subject to both the binding conditions (A) and (B). Then PRO is bound and free in its governing category, a contradiction if PRO has a governing category. Therefore PRO has no governing category and is therefore ungoverned. We therefore derive the principle (20), which as we found in § 2.4, is the essential property of PRO:

(20) PRO is ungoverned. (N. Chomsky (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht, 191) (Cohen 2000)

(PRO は節や NP 内では先行詞を決してもたないという点で、音形のある代名詞と同様であることに注意しよう。PRO はまた、固有の指示内容をもたず、先行詞によって指示を付与されるか、あるいは解釈不定で、特定の指示を欠くという点では照応形にも似ている。そうすると、PRO を代名詞的照応形とみなすのが妥当である。もしそうなら、PRO は束縛条件 (A) と (B) の両方に従う。したがって、その統率範疇において束縛され、且つ、自由であることになる。これはもし PRO が統率範疇をもつなら、矛盾である。それゆえ、PRO は統率範疇をもたないし、よって統率されることはないのである。したがって、原則 (20) が導かれる。これは2.4節で明らかにしたように、PRO の本質的な特性なのである。

(20) PRO は統率されない。

(安井稔・原口庄輔 (訳) ノーム・チョムスキー (著) 『統率・束縛理論』1986, 研究社出版)

Cohen によれば、これも、(25) と同じような推論過程が考えられるという。

- (27) a. PRO is bound and free in its governing category. (束縛理論の規則による)
- b. PROが統率範疇をもつとすると

- c. (a) と (b) から、PRO は統率範疇において束縛され、且つ、自由である。
- d. (c) は矛盾である。
- e. それゆえ、(b) の仮定が棄却され
- f. 結論: PRO は統率範疇をもたない。

(26) で、「PRO は束縛条件 (A) と (B) の両方に従う」とは、束縛理論 (A) 「照応形はその統率範疇内で束縛される」と束縛理論 (B) 「代名詞類はその統率範疇内で自由である」の両方にしたがうという意味である (Chomsky 1981: 188)。それゆえ、(27d) で述べているように、(27c) は矛盾となる。

この推論は、矛盾を証明するときの推論と同じであると、Cohen はいう。

- (28) a. If P then Q; (もしPならQ)
- b. assume P; (Pと仮定すると)
- c. by (a) and (b) , Q; ((a) と (b) からQ)
- d. but Q is, or leads to, a contradiction; (しかしながら、Qは矛盾である)
- e. hence assumption (b) is rejected, and we conclude; (それゆえ、仮定 (b) が棄却され、次の結論になる)
- f. $\neg P$. (Pではない)

(24a) (25a) と (28a) の違いは、前者が確定記述 (definite description) を含む文であるのに対し、後者が条件文である点である。Cohen は前者をそれぞれ次のように言い換え、条件文と同じ矛盾の証明 (Proof by Contradiction) で説明できるとしている。

- (29) a. If you catch a fish, the fish you catch will be a whale.
- b. If PRO has a governing category, then PRO is bound and free in its governing category.

(29) のようにすると、(24) (25) の結論部も同じ結果が得られる。 $\neg P$ 、すなわち、「あなたには魚は釣れない」(You will not catch any fish)、「PRO は束縛範疇をもたない」(PRO does not have a governing category) となる。Cohen は、前件 P が「偽」でも、If P, then Q. 全体は「真」になるので、The fish you catch will be a whale. と PRO is bound and free in its governing category. は「真」となるとしている。そのことは、ifで表される「含意 (implication)」の真理表の3段目から明らかである。

(30)	P	Q	$P \rightarrow Q$
	T	T	T
	T	F	F
	F	T	T
	F	F	T

(30) の真理表は「実質含意 (material implication)」と呼ばれ、論理的な含意を表しているであるが、日常言語では、If P, then Q の P が「偽」である場合、全体が「真」になるかといえばそうではない。例えば、「もし明日雨ならば、遠足がないと賭けるよ」というような因果関係を表す条件文は、明日雨についての情報が欠けていれば、賭けは説得力を失う (Allwood et al., 1977)。(29a) も同じことで、「君が釣る魚は鯨だろう」から「そんな魚はいない」すなわち「魚は釣れない」と推論することは正しいと思われるが、魚が釣れなければ、その魚が鯨であるかどうかを述べるのは説得力を失うと思われる。

さらに、問題なのは、The present King of France is bald も (24) (25) (28) と同じような推論過程が考えられる点である。

- (31) a. If the present King of France is bald, then there is a present King of France.
 b. assume the present King of France is bald;
 c. by (a) and (b), there is a present King of France;
 d. but there is no present King of France; then we conclude;
 e. we cannot say that the present King of France is bald.

ところが、The present King of France is bald. は「偽」と拒絶されるか、「真」でも「偽」でもない真理値を与えられないかである。決して「真」であることはない。

また問題なのは、Cohenが次の (32) のような例は、「偽」と拒絶される文であると述べている例も、(31) のような推論過程が書けてしまう点である。

- (32) a. The first fish I caught was a whale.
 b. It was discovered that in Latin PRO is bound and free in its governing category.
 (33) a. If you caught a fish, the first fish you caught was a whale.
 b. assume you caught a fish;
 c. by (a) and (b), the first fish you caught was a whale;
 d. but (c) is a contradiction,; then we conclude;
 e. you didn't catch any fish.

Cohen は、(32a) (32b) を問題となる確定記述の存在前提が事実として確立しているときとし、その場合は、例えば (32a) では was a whale と過去時制にするため矛盾になるのであり、全体が「真」とならないとする。その点が (23) (25) と違うところであるということになる。

(23) は、これから釣る最初の魚のことを述べており、まだ釣っていないのであるから前提が事実としては確立していない。つまり、(23) のようにこれから釣る魚は・・・と言っておいて、そんな魚はいないというのは矛盾ではないが、(32a) のように、魚を釣ったと言っておいて、釣れなかったと言うのは矛盾になってしまう。この違いは、「矛盾の主張」と「矛盾の立言」の違いでとらえることができる。前者 (23) は、「・・・ではない」と述べたことになり、まさ

に否定という発話行為をしたことになる。ところが後者(32a)は「・・・は矛盾である」と述べており、まさに「偽」であると話し手自ら述べた文、すなわち「嘘」を言った文となる。

前者の「矛盾の主張」あるいは「否定という発話行為」に似た働きは次のような Dutch 条件文と言われる文にも見られる。

(34) If the Regent of Lithuania visited Enid's art gallery, then I'm a Dutchman. (Kempton 1975: 93)

If X, then I'm a Dutchman は X と主張する馬鹿さ加減を述べる文であり、「X なんか絶対あるもんか」という意味になる。これは、後件が「偽」(私はオランダ人ではない)ことから、前件 X が「偽」であることを述べる修辞法として確立している表現である。

The present King of France is bald はどうであろうか。(23)(26)は矛盾から存在前提がないことを主張する文であった。(23)は、魚は鯨ではないので、そんな魚はいないと主張している文であり、(26)は、PRO が束縛且つ自由であるから、統率範疇を持たないと結論づける文である。ところが The present King of France is bald. は、もともとフランス王はいないことが前提として、我々の知識にあり、その人についてはげであるという陳述を行うのは不可能である、あるいは、もし言ってしまうと「偽」(「嘘」)を言った文になる。これは、存在前提そのものを主張(あるいは「凶」)として述べるのか、存在しない存在前提が背景としての位置にしかないかという違いになるであろう。

4. おわりに

このように、前提の問題は大きくは凶と地の対立をふまえて考えることができる。「フランスに王様がいる」という前提は、本来は(あるいはごく常識的には)話し手の現実空間では拒否されている(小泉 1990: 244)。つまりは拒否することそのものが話し手の意識の遡上に最初から登っておりいわば凶としての位置にあることになる。ところが(1c)のような文の前半部では、その凶が、主語位置にあるため、あたかもすべての人が認めている地として機能しているかのように扱われている。そこに矛盾が生じるのである。また、そのため(1c)の後半部で前提をわざわざ否定してみせるという作業が意味を持つてくる。Fauconnier (1985) 流に言うところ、話し手のメンタルスペースから別の人のメンタルスペースへと移行する前提浮遊が、いわば話し手一人の内部で起こっているように感じられる。いわば自己矛盾の世界である。これを意味論、語用論的にどう解決するのか。Carston の関連性理論流にあくまで、意味論を小さくして、語用論の一種アドホックな世界で処理するのが大きな問題として浮かび上がってくる。この点については次のその 2 で考察したいと思う。

参考文献

- Allwood, Jens, Lars-Gunnar Andersson and Osten Dahl. 1977. *Logic in Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Burton-Roberts, Noel. 1989. "On Horn's Dilemma: Presupposition and Negation." *Journal of Linguistics* 25, 95-125.
- Carston, Robyn. 1996. "Metalinguistic Negation and Echoic Use." *Journal of Pragmatics* 25, 309-330.
- . 1998. "Negation, 'Presupposition' and the Semantics/Pragmatics Distinction." *Journal of Linguistics* 34, 309-350.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Cohen, Ariel. 2000. "The King of France is, in Fact, Bald." *Natural Language Semantics* 8, 291-295.
- Fauconnier, Gilles. 1985. *Mental Space. Aspects of Meaning Construction in Natural Language*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Grice, Paul. 1975. "Logic and Conversation." In P. Cole and J. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics*, vol. 3, *Speech Acts*, pp. 41-58. New York: Academic Press.
- Horn, Laurence. 1985. "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language* 61, 121-174.
- . 1986. "Presupposition, Theme and Variations" *CLS 22/2: Papers from the Parasession on Pragmatics and Grammatical Theory*. 168-192.
- . 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Kempson, Ruth M. 1975. *Presupposition and the Delimitation of Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 小泉保. 1990. 『言外の言語学—日本語語用論—』東京: 三省堂.
- Lewis, C. I. 1956. *Mind and the Word Order*. (2nd Ed.) New York: Dover.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press. (安井稔・奥田夏子 (訳) 『英語語用論』東京: 研究社出版)
- . 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Linsky, L. 1963. "Reference and Referents." In T. Oshewsky (ed.) *Problems in the Philosophy of Language*, pp. 333-350. New York: Holt.
- Marmaridou, Sophia S. A. 2000. *Pragmatic Meaning and Cognition*. Amsterdam: John Benjamins.
- 西山佑司. 1983. 「文の論理構造」安井稔・中右実・西山佑司・中村捷 (著) 『英語学大系 第5巻 意味論』東京: 大修館書店, pp. 128-228.
- 太田朗. 1980. 『否定の意味—意味論序説—』東京: 大修館書店.
- Russell, Bertrand. 1905. "On Denoting." *Mind* 14, 479-493.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1986/19952. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

Strawson, P. F. 1950. "On Referring." *Mind* 59, 320-344.

一. 1964. "Identifying Reference and Truth-values." *Theoria* 30, 96-118.

田中廣明. 2001. 「メタ言語否定について—話し手の意図と聞き手の解釈—」『関西外国語大学研究論集』第73号, 1-16.

梅森佳子. 1998. 「外部否定とメタ言語否定」*KLS* 18 (Kansai Linguistic Society), 175-184.

吉村あき子. 2000a. 「メタ言語否定と関連性理論」『学習院大学言語研究所研究集会: 関連性理論研究は認知・言語の研究に何を寄与しうるか』口頭発表.

一. 2000b. 「メタ言語否定と関連性理論」『英語青年』第146巻 第7号, 438-439.